

図8： 2003年南極上空における、a)PSCの発生確率(P_{PSC})と気温、b)NATタイプのPSC飽和温度以下になる確率($P_{T(NAT)}$)と硝酸量、c)NAT飽和温度とその場の気温の差とPSC出現量の指標となるエアロゾル消散係数の高度分布の遷移。d)は、ILAS-IIの観測緯度を示す。8月下旬から9月上旬にかけての高度22 km付近の、area 1と書かれた領域では、 P_{PSC} と $P_{T(NAT)}$ との値に、大きな違いがあることが判る。

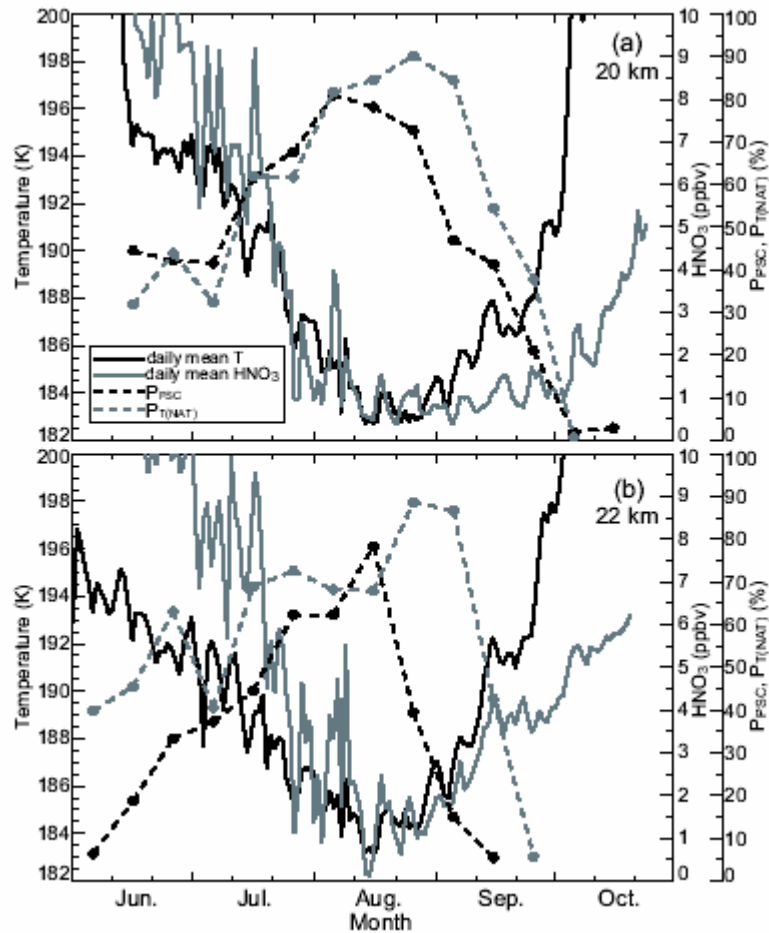


図9： 2003年南極上空の高度20kmと22kmでの気温(黒色の実線)と硝酸濃度(灰色の実線)、 P_{PSC} (黒色の破線)と $P_{T(NAT)}$ (灰色の破線)の時間変化。8月下旬から九月初旬にかけて、 P_{PSC} と $P_{T(NAT)}$ の差が大きくなっている。このことから、南極の冬の後半は、低温にもかかわらずPSCがあまり出現しないことがわかる。